





























































の配慮があれば更にすぐれた論文になっていたことが指摘された。公開審査において、申請者は質問に対して的確に応答した。

以上のように申請論文には不十分な点が見られるものの、それらは申請論文の基本的な価値を損なうものではない。長い時間をかけて地道にフォースター研究に打ち込んだ粘り強い、誠実な申請者ならではの論文であることは審査員の一致した所見であり、課程博士論文として十分に評価できる。

#### 試験または学力確認の結果の要旨

申請者は立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程に在学中に本論文の骨子をなす複数の論文を学術雑誌に公表し、学会において口頭発表も行っている。また、当審査委員会は学位申請者が博士学位に相応しい学力の所持者であると認め、本学学位規程第二十五条第一項にもとづいて試問の全部を免除した。当審査委員会は、以上の諸点を総合的に判断して、本学学位規程第十八条第一項により、博士(文学 立命館大学)の学位を授与することを適当と認める。

早川 由希子

### “Searching for the Self in Sylvia Plath’s Poetry”

学位の種類 博士(文学)

授与年月日 二〇〇八年三月三十一日

審査委員

主査 Robert MacLean

副査 丸山 美知代

副査 高島 清

#### 論文内容の要旨

The thesis is a depth study of Sylvia Plath’s search for an authentic self within her poetry. It is conducted from three perspectives: an explication of poems seminal to her oeuvre, in particular from the posthumously published *Ariel* (1965); a comprehensive reading of Plath’s journals, letters and autobiographical novel, *The Bell Jar* (1963); and analysis from the vast field of secondary critical literature which has proliferated around Plath’s cult status as an icon of the feminist movement.

Chapter 1, “The Reincarnation of a Father Figure,” considers five major poems which explore the complex daughter-father nexus. Plath undergoes a series of descents to confront her father, who died when she was eight years old (“I would breathe water”). He is visually imaged as a drowned sea-god and colossus, with their Greek and













































内容と体裁が博士論文にふさわしいことを確認した。また、審査の過程を通じて論文提出者が英語とイタリア語に通曉することも確認したため、本学学位規程第二十五条第一項により、これに関わる試験の全部を免除した。以上の総合判断に基づき、審査委員会は本学学位規程第十八条第二項により、博士（文学 立命館大学）の学位を授与することを適当と認めるものである。

瀬口真司

### 『西日本縄文集落の研究』

学位の種類 博士（文学）

授与年月日 二〇〇八年九月十二日

審査委員

主査 和田晴吾

副査 泉拓良

副査 矢野健一

### 論文内容の要旨

本論文は、西日本の縄文時代の集落に関する研究である。特に、著者が研究のフィールドとしている琵琶湖周辺地域の遺跡をすべて集成し、詳細な分布図や消長表を作成するとともに、関西地方を中心とした遺跡、遺構、遺物を総合的に分析すると同時に、東日本縄文集落との比較検討を行っている点の特徴である。本論文は、著者の論文二〇本を加筆修正したものに若干の書き下ろしを加えたもので、近日中に出版予定である。文字数は約五〇万字で、図が八九、表が三四添付されている。5章から構成されており、以下、各章ごとに要旨を述べる。

「第1章 西日本縄文集落研究の意義」では、「第1節 西日本縄文集落研究の課題」で、東日本も含めた縄文集落研究史を、「集落の形態・構造に関する研究」「集落（遺跡）群の性格に関する研究」「集落の移動と領域に関する研究」「定住集落の成立に関する研究」の四つの分野に区分し、概述している。この中で、西日本では、「集落（遺跡）群の性格







これに関わる試験の全部を免除した。

以上、総合的に判断して、本学学位規程第十八条第二項により、博士（文学 立命館大学）の学位を授与することを適当と認めるものである。

木 股 知 史

『画文共鳴』『みだれ髪』から『月に吠える』へ』

学位の種類 博士（文学）

授与年月日 二〇〇八年九月十二日

審査委員

主査 木村 一 信

副査 中川 成 美

副査 澤 正 宏

論文内容の要旨

本論文は、書物、雑誌における挿絵や装幀などの美術的要素が、文学の言語表現と交流し共鳴することによって作り出される美の領域を研究の対象としている。論文題目の「画文共鳴」という言葉は、視覚的イメージと文学とが響きあって作り出す表現世界のことを指している。

一九〇〇年代から一九一〇年代にかけては、日本近代文学の表現史の上で、視覚的イメージと文学が共鳴する試みが活発に展開された時期であった。この時期は、西洋美術が近代日本に定着してゆく過程であり、印刷技術は発展の途上にあり、完全に機械化されず、木版や石版といった手わざが生きる技法が、図版印刷のなかで重要な位置を占めていた。そのため、雑誌や書物を舞台として、画家と詩人たちが、協力して美術と文学の共鳴を意図したさまざまな試みを行った。本論文は、与謝野晶子『みだれ髪』（一九〇一年）から萩原朔太郎『月に吠える』（一九一七年）に至る流れを取り上げている。『みだれ髪』から『月に吠える』の系譜





全体的に言って、「文」と「画」には、近世期以来の文芸・芸術における共存形態があり、そうしたものと、論者がとりあげた一九〇〇年代初頭から二〇年代へのそれらとの関わりについても、簡単であっても論述が必要ではなかったか。また、論者のいう「文」と「画」との「共鳴」に反応した読者の側からの視点が、論述として必要ではなかったかという問題が感じられる。そこには、読者のリテラシーを形成していった近代日本の表現史上の大事な論点もあるからである。

とはいうものの、本論文は、これまでの研究には見られない多くの卓見と示唆に富み、詩歌研究、表現史研究に多大な足跡を残す成果と思われる。今後の研究に強い影響力を持つであろう。

#### 試験または学力確認の結果の要旨

申請論文は、上に述べてきたようなすぐれた出来栄を示しているし、また、すでに学界などにおいても高い評価を受けている。申請者の研究者としての力量もきわめて高いものがあることは知られている。研究対象は、専門領域である与謝野晶子や石川啄木などの研究をはじめ、象徴主義研究、現代の文学研究（村上春樹など）にもわたり、幅の広い活躍をしている。申請論文には、英語とフランス語による要約文が付せられており、その語学力にも問題はないと判断し、本学学位規程第二十五条第一項により、これに関わる試験の全部を免除した。

審査委員会は、以上の諸点を総合的に判断し、申請論文は本学学位規程第十八条第二項により、博士（文学 立命館大学）の学位を授与することを適当と認める。